

紫式部の笑い声

text by Shinji Ishii
文いしいしんじ

うちの近くに紫式部の墓所がある。
だから、というわけではないけれど、この春から京都新聞で『源氏物語』の現代語訳を連載している。毎週月曜日、三分の二ページくらいのスペース。五カ月つづけていると、まわりからいろんな反応がある。

「読みやすい」という声があれば、「むつかしい」という声もある。「あれで、京都新聞の偉いさんから、だいじょうぶなんか」と心配してくれるひとがいれば、「もつとがながんいったれ、エロがたらんのとちゃうか、エロが」というひともいる。

現代語訳、というより、心情としては、現代に紫式部がいて、いまの呼吸で書いていけばどうなるか、という実験小説でもある。

「京ことばによる源氏」と解説されることがあるが、僕は大阪生まれなのでネイティブの「京ことば」は、僕は浄瑠璃、義太夫で、この作品を何度も見、聴いたことがあった。高校生のころから文楽劇場にかよった時に、僕のなかに、「千本桜」の声が、幾層にも降り積もっていった。訳するにあたって、僕はそれらの声を、読みものとして楽しめるよう、紙の上で再構成していけばよかった。

源氏物語の冒頭は、それこそ古文の授業でほとんどの日本人がならっている。

「いずれの御時にか、女御、更衣、あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり」

いしい訳ではこうなる。

「どの帝様の、ころやったやろか。

女御やら、更衣やら：ようさんいたはるなかに、最高位のご身分でもあらしまへんに、とくべつなご寵愛をうけはった、更衣はんがいてはってねえ」

幼女・紫の上をかどわかすシーンでは、

「え、な、なに！紫ちゃん、ひっくり返って

京ことばは、書けないし話せない。百歩ゆずって京都弁、もしくは、架空の町・京都の若い女性が話している、架空の日本語、といたい。この意味でも現代語訳、というよりは、いくつもの層にフィクションを重ねた、現代の読み物なのである。

高校生のころ、谷崎潤一郎訳でさいごまで読んだ。そのあと『細雪』を読んだら、源氏物語のつづき、宇治十帖の、時代をへだてたさらに十一帖目にしか思えなかった。あるいは『源氏』が、『細雪』の、壮麗で長大なプロローグにおもえた。谷崎は紫式部と光源氏の息子である。僕にはそうとしか考えられなかったし、谷崎も同じような感触を、理屈をこえて、からだのなかに響く「こだま」から感じとったのではないか。

瀬戸内寂聴訳、円地文子訳も開いてみただけれど、谷崎みたいな、時空をこえる感じはおぼえなかった。谷崎は『源氏』の翻訳を、ま

仰天。大パニック！「えー、それ、ちょっとひどくない？」て源氏の君。「ばかかて、おとうはんと、おんなじやで」そないいいながら、紫ちゃん、お姫様抱っこして出てきはるん。少納言、惟光くんまで、「な、なにしはります！」立ちつくしてどん引きや」

あくまで、京ことばではない。架空の京都での話し言葉。訳していて、ふと、原文のむこうから、かすかに声がきこえてくるときがある。谷崎のからだに響いた「こだま」。文楽劇場で浴びた「声」。僕は目をあけたまま耳をすませる。いや、目をすませる。紫式部は京都のひとだった。本人が、僕のきょう歩いた土地を、1000年前まがいなく歩いていった。そして世界史上初の長編小説を、たった

ちがいに現代文学としておこない、時間の闇を明るく照らしつけて、みずからの、後半生の文学にも直結させることに成功した。

つまり、『源氏物語』の中身は、語りは、それくらい現代的なのだ。平安朝のことばづかいに、惑わされてはいけぬ。

とはいえ僕自身、大学生の頃、オリジナルをいちおう読み通したものの、「さいごまでめくり終えた」くらいが実感で、正直、半分からあとはなんにも記憶に残っていない。教科書で習った古文。平安の時代絵巻。いまだき誰が十二単。「源氏」といえば、みなさんの思われるところも、だいたいこんなところだろう。

京都新聞から、古典の新訳を、という依頼があったのは、河出書房新社の『日本文学全集』のなかで、僕が『義経千本桜』の現代語訳を手がけたからにちがいない（そういえばこちら

ひとり、女性として書いたのだ。

2017年の僕は、1000年前に紫式部の吐いた息の一部を、吸って書き、吸って歩いている。そこに彼女の声が響いていないわけがないだろう。

源氏物語をひらくときいつも、耳のうしろで紫式部のくすくす笑いがきこえる。現代と平安が、ことばのなかでひとつになる。住んでいると、そういうことがしょっちゅうおこる。京都とはそういう町だ。



京都府京都市

面積: 827.83km²
総人口: 1,474,735人(2016年10月1日)
人口密度: 1,780人/km²
市の木: シダレヤナギ、タカオカエド、カツラ
市の花: ツバキ、ツツジ、サトザクラ
自治記念日: 10月15日



Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説『ぶらんこ乗り』『麦ふみクーツェ』『ポーの話』『みずうみ』『四とそれ以上の国』など、エッセイ『人生を救え!』(町田康共著)『熊にみえて熊じゃない!』『遠い足の話』、絵本に『赤ずきん』(ほしよりこ絵)など多数。